様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 1 日現在

機関番号：18001
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19310158
研究課題名（和文）多言語地域における言語教育カリキュラムの開発―日越地域共同研究―

研究課題名（英文）Development of language education curriculum in multilingual regions by joint research between Japan and Viet Nam

研究代表者
村上　呂里（MURAKAMI RORI）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：40219910

研究成果の概要（和文）：本研究では、授業と学びの場を共有する「カリキュラム実践」研究（佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房、1996）という立場に立ち、多言語地域である沖縄、東京新宿区、ベトナム北部山岳地域の小学校で相互に提案授業を行い、多言語社会を豊かに切り拓く言語教育カリキュラム開発の基本的視点を実践的に提案した。この共同研究を通し、沖縄では、共通語との関わりのもとに地域の「伝統的な言語文化」を学ぶ『沖縄発・「伝統的な言語文化」の学びの創造』という冊子を作成し、広く配布した。またベトナムでは、今日の教育改革で議論されている「子ども中心主義」について、方法論として導入するのではなく、少数民族の子どもたちの尊厳を大切にするという教育思想からとらえることの重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study has carried out the field studies sharing lessons in the elementary schools in Okinawa and Shinjuku in Tokyo, and the mountainous regions in northern Vietnam.These three regions are multilingual communities. This is due to the standpoint of "practical research on curriculum" by Manabu Sato（"Criticism of Curriculum" by Sato, 1996）. Through making teaching suggestions to each other , we proposed the practical point of view the basic curriculum development for language education opens up a multilingual society where minority's dignity is valued . Through this collaboration, we published the learning Guide booklet "For creating interesting lessons of traditional linguistic oral and literal cultures of Okinawa" and we have widely distributed the booklet to teachers of Okinawa. And we have also discussed and clarified that educational reform in today's "centrism Children on" in Vietnam should be recognized to enrich the facts from the educational ideas that value the dignity of children of ethnic minorities instead of introducing only as methodology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2009 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2010 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
総　計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：教育学
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：多言語社会、カリキュラム開発、地域間共同、少数民族、言語権

１．研究開始当初の背景
代表者は、独自の語文化を発展させながら、近代学校において地域語文化が厳しく抑圧された沖縄地域と、多くの少数民族が居住するベトナム北部山岳地域の比較言語教育史に取り組んで来た。史的考察およびフィールドと調査を通して、両地域の小学校では、（１）固有の言語と文化の尊厳の保障、（２）地域語・民族語文化の継承と創造的発展、（３）言語問題を背景とした「学力問題」等、多くの矛盾葛藤・課題を共有していることが明らかになった。そこで地域間共同によって、これらの課題に実践的に取り組み、豊かな多言語社会を展望する言語教育カリキュラム開発を志した。

２．研究の目的
沖縄とベトナム山岳少数民族地域の小学校が抱える（１）固有の言語と文化の尊厳の保障、（２）地域語・民族語文化の継承と創造的発展、（３）言語問題を背景とした「学力問題」等の課題に共同で取り組み、豊かな多言語社会を展望する言語教育カリキュラム開発の基本的視点を明らかにする。

３．研究の方法
本研究では、授業と学びの場を共有する「カリキュラム実践」研究（佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房、1996）という立場に立ち、多言語地域である沖縄、東京新宿区、ベトナム北部山岳地域の小学校で相互に提案授業を行い、ベトナム人教員・研究者、日本人教員・研究者が共同授業研究会を持った。
第１回 沖縄の地域伝統的文学オモロ歌謡を教材とした提案授業（村上等が開発した単元「あけもどろの花」）（うるま市立伊波小学校）
第２回 東京都新宿区大久保小学校日本語国際学級におけるバイリンガル授業
第３回 ベトナムタイグェン省クックドゥオン小学校にて
（１） Dang Thi Thao 先生「ベトナム語」の授業（小学１年）
（２） Dinh Thi Minh Hoa 先生「地理」の授業(小学４年)
（３） 善元幸夫「太陽と山に住む人たち」(1)（小学４年）
（４） 西岡尚也「世界地図ができるまで」
第４回 琉球大学附属小学校における「対話」をテーマとした「国語」の授業（小学１年）
第５回 クックドゥオン小学校にて
（１） 善元幸夫「太陽と山に住む人たち」(2)（小学５年）
（２） 西岡尚也「世界の食べもの」（小学校２年生）

こうした提案授業および授業研究会を重ねることを通して、言語教育カリキュラム開発の基本的視点を明らかにしていった。
また並行して、村上は、最近他のアジア諸地域から来た女性を母親とする児童が増えつつある沖縄の離島の小学校をフィールドとし、児童の母語文化の学びを位置づけた単元を開発し、実験授業を行った。なおこの離島をフィールドとした共同授業研究会の成果については、最終年度のシンポジウムで、研究協力者である山口剛史が報告し、ベトナム側研究者と討議を行った。

４．研究の成果
共同授業研究会を通して明らかになったことは以下の通りである。
（１）ベトナムでは、憲法で少数民族の言語と文化の権利の保障が掲げられている。「地理」などの教科で、各少数民族の文化の多様性と尊厳を学ぶ単元が位置づけられ、日本の教育においても学ぶ点は大きい。しかし、一斉注入式授業および権威主義的教師像が根強く、授業についていけない子どもは取り残され、言語や生活の困難等でハンディを抱える子どもの尊厳を大切にしながら授業を展開するという発想や方法論が教員文化として非常に弱いとうかがえる厳しい現状が見られた。近年のベトナム教育改革においては、「子ども中心主義（ベトナム語では、(ベトナム語では、**lam hoc sinh trung tam**:漢越語を直訳すると「学生（注　高校生以下の児童・生徒の呼称）中心主義」」の理念が導入されたが、そのありかたは競争的なゲームの導入などによる授業の活性化など形式的操作主義的なものにとどまり、教育思想として根づくまでにはかなりの年数を要すると考えられる。
そうした現状のなかで、本研究がフィールドとする地域では、少数民族の言語と文化の尊厳の保障と「子ども中心主義」の教育思想とを有機的にリンクさせながら、「子ども中心主義」の内実を豊かにつくりあげるカリキュラム開発を行っていくことが大切である。
本研究では、日本の多言語地域新宿区の小学

校でマイノリティの尊厳を大切にしてきた小学校教員善元幸夫による対話型授業等を実際に見てもらうことを重ねるなかで、ベトナム人教員から、自らの教師像を省察し、子ども中心主義の思想に立った授業について「自分たちにもできるかもしれない」との感想を得ることができたのが最大の成果である。

（２）豊かな多言語社会を切りひらくカリキュラム開発の基本的視点としては、以下の点が明らかになった。これは、他の離島やアジア地域からの移住者が多い沖縄のある離島の小学校における授業研究と関わらせながら、得た知見である。

① 多言語地域のカリキュラム開発においては、何よりも(ｱ)言語によるハンディや生活の困難を抱えた子どもたちの自尊感情を育成する視点が根幹に据えられなければならない。自尊感情を育成することによって学習意欲が湧き、はじめて(ｲ)普通語（共通語）を効果的科学的に習得させることによって学力を保障していくという視点が活きる。

② 自尊感情の育成のためには、子どもの母（語）文化や親の仕事、自分たちが住む地域の独自性や文化を素材としたカリキュラム開発が必須である。その際、子どもの父母や地域の人材を活かし、父母や祖先、地域に対する誇りを育むことができる。

③ 地域の特産物等の実物教材や芸能文化の実演などを“ほんもの”の文化との出会いを位置づけ、五感ひいては魂に働きかけるカリキュラム開発が重要である。自らの「感覚」をくぐらせることによって、母文化や親の仕事、地域に対する誇りを内側から育てることができる。
また五感、ひいては魂に働きかけることによって、知識や能力の優劣を感じさせず、全員が参加できる場をつくっていくことができる。

④ 一斉注入式授業ではなく、教師像や机の配置等も対話型授業とし、授業のなかで「大切にされている、先生との関係だけではなく、相互に学び合うことは楽しい」などを実感させ、「居場所」をつくることができ、自尊感情の育成や学習意欲の喚起へとつながっていく。

⑤ 生活に根ざした思いや考え「書く」活動を位置づけ、それを学習材として単元を組み換えていく対話生成的なカリキュラム編成としていく。それは教師にとっても大きな学びとなり、子どもたちの生活現実が抱える困難を共に考え、探究し、切りひらくカリキュラム開発へとつながっていく。

⑥ 子どもの視野を、地球規模に広げ、自らの地域と世界の諸地域の固有性と共通性・普遍性を認識させることにより、地域に対する偏見を超え、世界の地域との「つながり」の感覚を持たせるとともに、他地域の文化の尊厳を大切にする姿勢を育むことができる。

⑦ 子どもの視野を、宇宙で誕生した命、人類の誕生と移住、それによる多様な民族の誕生へと広げ、「みんな、太陽の子」という感覚を根底に育むことによって、自他の命ある存在の平等と尊厳への認識を育てることができる。

⑧ 自らの居住する地域→世界や地球などグルーバルな視野→宇宙で育まれた命への視野への広がりを、らせん状的に学習することによって、「多文化共生」の内実を子どもたち自身が深めうるであろう。

今回は、少数民族地域の小学校を主なフィールドとして共同授業研究を行った。マイノリティにふれることが少ない小学校において多文化共生の認識を育てるカリキュラム開発が、実はさらに重要であると考える。こうした点が課題として残された。

（３）沖縄地域においては、近代国民国家形成の過程において、固有の言語文化が厳しく抑圧された歴史があり、今日その伝承および創造的発展が喫緊の課題とされる。こうした課題に応えるものとし、本研究での提案授業を位置づけた副読本『沖縄発「伝統的な言語文化」の学びの創造』（小学校編・中学校編）を作成し、広く地域に配布した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 村上呂里、単元「あけもどろの花」―小学生による沖縄古典文学『おもろ』群読の試み」、招待論文、日本国語教育学会『国語教育研究』、2008 年 1 月号、4-9 頁

〔学会発表〕（計４件）

①□村上呂里、善元幸夫、西岡尚也、多言語社会における言語教育カリキュラム開発への視点、日本教育方法学会、2010 年 10 月 10 日、国士舘大学

②□村上呂里、沖縄アジアへ、多言語社会をのぞむ、第 10 回多言語社会研究会沖縄例会、2009 年 9 月 13 日、沖縄教育福祉会館

③□西岡尚也、多民族教育における地球儀活用の有効性―新宿区立大久保小学校の事

例を中心に、沖縄地理学会、2009 年 7 月 26 日、沖縄国際大学

〔図書〕（計６件）

① 村上呂里・西岡尚也・那須泉・善元幸夫、多言語地域における言語教育カリキュラム開発―日越地域共同研究・研究成果中間報告書、2010 年 3 月、全 123 頁
② 村上呂里他（共著）、国際印刷、沖縄発「伝統的な言語文化」の学びの創造、2010 年 3 月、全 145 頁
③ 村上呂里他（共著）、沖縄タイムス社、融解する境界―やわらかな南の学と思想２、2009 年 5 月、74-83 頁
④ 村上呂里・西岡尚也・那須泉、多言語地域における言語教育カリキュラム開発―日越地域共同研究・研究成果中間報告書、2009 年 3 月、全 123 頁
⑤ 村上呂里他（共著）、渓水社、国語教育を国際社会へひらく、2008 年 3 月、124-144 頁
⑥ 村上呂里（単著）、明石書店、日本・ベトナム比較言語教育史―沖縄から多言語社会をのぞむ、2008 年 3 月、全 455 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

① http://www.u-ryukyu.ac.jp/top_news/hot/research20110113/index.html
「ホットな研究(6)村上呂里『みんな、太陽の子』」
② Nguyen Thi Nhung（タイグェン師範大学教授・研究連携者）、「桜の国で感じたこと」、『タイグェン新聞』、2009 年 11 月 7 日付け
③ 佐渡島紗織、［書評］村上呂里著『日本・ベトナム言語教育史―沖縄から多言語社会をのぞむ―』、全国大学国語教育学会学会誌『国語科教育』№66、2009 年 9 月、84-86 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

村上　呂里（MURAKAMI RORI）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：40219910

(2)研究分担者

西岡　尚也（NISHIOKA NAOYA）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：60336360

善元　幸夫（YOSHIMOTO YUKIO）
琉球大学・教育学部・非常勤講師
研究者番号：40587739

那須　泉（NASU IZUMI）
琉球大学・法文学部・非常勤講師
研究者番号：20381204

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：